# W-3
# 宮古・八重山諸島のアクセント研究の新展開：その韻律単位と類型

企画者　新田 哲夫（金沢大学名誉教授）

**ワークショップ趣旨**

南琉球（宮古・八重山）のアクセントの記述研究は、2010 年代になって新しい時代を迎えた。それまでこの地域のアクセントは「二型アクセント」あるいは「一型アクセント」と見られていたが (平山他 1967)、宮古諸方言の多良間方言、池間方言においてタイプの異なる「三型アクセント」が発見された (松森 2010，五十嵐他 2012)。その後、南琉球において複数の「三型体系」が確認され、その分布域は現在も広がりを見せている。この三型体系がすっきりした姿で見えてきたのは、音調の観察に種々の環境を用意した調査法の工夫の他に、本土方言では設定されなかった「韻律語」と呼ばれる韻律単位による分析、またはフット構造に注目した分析を行った成果でもある。このワークショップでは、南琉球の最近のアクセント研究の流れを追いながら、宮古・八重山諸方言に設定しうる韻律語とフット構造に関して理論的な検討を行う（発表 1，2)。また、宮古諸方言を例に取り上げながら、表層の異なる各方言に通底する三型体系の共通特徴について述べ（発表 3)、最後に現在、八重山（石垣・西表）諸方言において次々と発見されつつある三型体系ついて、研究の現状を報告する（発表 4)。

**各発表の題目と要旨**

**発表 1：松森晶子「南琉球の三型体系発見の持つ理論的意義 —特に韻律階層に焦点を当てて— 」**

松森 (2010) の多良間方言や五十嵐ほか (2012) の池間方言を皮切りに、南琉球（宮古・八重山諸島）には 3 種類の韻律型の区別が見られる「三型体系」が次々と発見されつつある。これらの三型体系の発見は、プロソディーの類型的考察の観点から見て特に価値が高い。従来の日本語の韻律研究では、ある体系のアクセント位置の算出に関わる単位が「モーラ (μ) か、音節 (σ) か」というパラメータが想定されてきたが、これら南琉球の三型体系の多くではそれらより大きい韻律範疇である「フット ( f )」や「韻律語 (ω)」が、その韻律型の決定に積極的に関与するからである。本発表では 2010 年頃からの南琉球のプロソディー研究史を簡単に概説した上で、宮古諸島の伊良部島佐良浜方言、宮古島与那覇方言、八重山諸島の黒島方言の三型体系について、その韻律型の異同がどのように生じたかを見ていく。また本発表では「韻律階層 (The Prosodic Hierarchy)」の発想を採用しながら、上述の３つの三型体系の韻律型の実現に ①フットがどのように関わっているか、②韻律語に再帰的な構造が想定できるか、という２点に絞った検討を行う。

**発表 2：五十嵐陽介「南琉球宮古語池間方言における韻律的単位「韻律語」の特性」**

本発表の目的は、南琉球諸語の韻律体系の記述に用いられる韻律単位「韻律語」の特性を、宮古語池間方言を例に取って論じることにある。韻律語を定義づける特徴は 2 モーラ以上の形態素との一対一の対応にある。南琉球諸語では、アクセント型付与の領域となる単位を構成する特定の韻律単位に卓立が置かれ、その卓立の位置によって型が対立する。卓立の位置の計算に用いられる韻律単位すなわち「数える単位」が、南琉球諸語では韻律語である。池間方言では、ほとんどの 1 モーラ形態素と動詞接辞を除いて、1 つの形態素は 1 つの韻律語に写像される。この事実は、南琉球諸語を除く日琉語諸方言の「数える単位」が音節やモーラである事実と対照的である。さらに池間方言には、韻律語を領域として形成されるフットに基づく韻律現象も存在し、これにより韻律語がフットの直上に位置する韻律単位であることが示される。

**発表 3：新田哲夫「動的音韻解釈からみた南琉球宮古諸方言の三型アクセント体系」**

多良間方言 (松森 2010, 他)、池間方言 (五十嵐他 2012) のほか、宮古諸方言には複数の三型アクセント体系が存在することが明らかになっている。この発表では、池間方言、多良間方言、および与那覇方言を取り上げ、「韻律語」を基本単位に据えた動的音韻解釈を試みる。動的な観点からは、池間方言はマークされる韻律語の次の韻律語を上げる「上げ核」、多良間方言は上昇と下降が環境的変異として顕れる「低核」 (新田 2023)、与那覇方言はその韻律語から昇っていく「昇り核」があると見なされる。a, b, c の型から成る「三型アクセント体系」は、方言間で表層の音調と核の弁別特徴の違いはあるものの、a 型: ( ) ( )、b 型: ( ) ( )*、 c 型: ( )* ( ) に集約できることを述べる。

**発表 4：セリック・ケナン、麻生玲子「南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告」**

南琉球諸方言のアクセント体系を正しく記述するためには、本土や北琉球諸方言とは異なる理論的枠組みとそれに基づいた調査法が必要であることが解明されつつある (松森 2015、五十嵐 2016 など)。この新しい理論的枠組みと調査法を適用することで、個別方言におけるアクセント型の基本的な対立数を見直すなど、伝統的な調査法で見いだせなかった発見が次々と報告されてきた (松森 2013、2016 など)。しかし、現状もなお、この新しい理論的枠組みと調査法がいまだに適用されてこなかった方言が残っており、これらの方言のアクセント体系が正しく記述されていない可能性が大きい。

本発表では、以上を踏まえて、二型のアクセント体系を持つとされてきた八重山語の 4 つの方言（大浜、宮良、西表古見、石垣四箇）を取り上げ、筆者らの調査結果と『石垣方言辞典』 (宮城 2003) のデータに基づき、これらの方言について次の 2 点を明らかにする。(1) これらの方言は 3 つのアクセント型が区別されている。(2) 各アクセント型の音韻的解釈をするにあたって、南琉球のアクセント体系を分析するために提案されてきた「韻律語」という韻律的な単位を想定する必要がある。以上 2 点のうえで、対象方言のアクセント体系について新しい音韻的解釈を提示し、八重山祖語で再建されるアクセント体系との通時的な関係について簡単に指摘する。

【参考文献】五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33–57. ／五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16( 1 ): 134–148. ／新田哲夫 (2023) 「南琉球多良間方言アクセントの弁別特徴」『金沢大学歴史言語文化系論集 言語・文学篇』15: 1–20. ／平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院. ／松森晶子 (2010) 「多良間島の３型アクセントと『系列別語彙』」 上野善道 監修 『日本語研究の 12 章』: 490–503. 明治書院. ／松森晶子 (2013)「宮古島における 3 型アクセント体系の発見：与那覇方言の場合」『国立国語研究所論集』6: 67–92. ／松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系：その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要 文学部』64: 55–92. ／松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み：その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』150: 59–85. ／宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社. ／Ito, Junko & Armin Mester (2013) Prosodic subcategories in Japanese. *Lingua* 124: 20–40. ／Selkirk, Elizabeth (2009) On clause and intonational phrase in Japanese: The syntactic grounding of prosodic constituent structure. *Gengo Kenkyu* 136: 35–73.

付記: この研究は、JSPS 科学研究費補助金 課題番号 20H01259「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」および国立国語研究所第 4 期共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の共同企画である。